

---

# 陸を渡った人魚姫

まめ太

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

陸を渡った人魚姫

### 【Nコード】

N3447T

### 【作者名】

まめ太

### 【あらすじ】

現在は閉じているHPで発表した作品の、ほんの一部を再公開。

あつたのかも知れないし、なかつたのかも知れない。  
眞実は、不死の魔神たちのみが知る。

ダイトーが、まだダイトーとは呼ばれていなかった頃のお話。  
その大きな国の見目麗しい立派な王子は、船に乗り、南の国を見聞  
に出た。

勇敢で賢い王子だったので、どの国に着いても歓迎された。  
そんな有る日、王子の乗った船は嵐に会い、人々を乗せたまま、海  
に沈んでしまった。

王子は力の続く限りと泳ぎ続けたが、ついには力尽きて海の底へと  
沈んでいった……。

その手を引いたのは、一人の美しい人魚だった。  
人魚は一目見るなり、王子の虜となり、急いで陸へと連れ戻った。  
水を吐かせ、息を吸わせ、清水で喉を洗ってやって……そうして  
王子は気がついた。

けれど、王子の言葉は異国の言葉。人魚には理解が出来なかった。  
同じように、人魚の言葉も王子には解からないものだった。  
命を救った恩人のこの人魚を、王子はとても慈しみ、二人は愛を育  
んだ。

言葉は通じなかったけれど……心でそれを補った。  
やがて王子の帰る日が出て来た。  
大きな船に、大きな風呂桶を積んで、王子は人魚を連れて帰った。

人魚は産まれて初めて陸を渡った。

「王子様、見るもの全てが初めてです、  
なんて広い大地、なんて広い緑、なんて広い空……  
ああ、この木々の連なりはなんですか？ まるで、海のように……」

「それは森、と言うのだよ。」

森。 森？ そう、森。 何度も何度も同じ言葉を繰り返し、二人で言葉を重ねあい、そうして「森」を心に刻み込む。

人魚は少しずつ王子の言葉を喋り出し、王子は少しずつ人魚の言葉を理解した。

あれは牧場。 牧場？ そう、牧場。

辛抱強く、ゆつくりと、二人は愛を育んだ。

王子の国に着く頃に、人魚は魔力を使って尾びれを足に変えてみた。とても多くの力を使ったけれど、王子はとても喜んだ。

人魚の魔力は特別のもの。とても大切なもの。それを、王子と同じになるために使った。

「姫、私の傍に居ておくれ。」

私の傍で微笑んで、私の子を産んではくれないか？」

王子は人魚を妃に迎えた。人魚は姫となった。

とても仲睦まじい夫婦になった。

賢い王子と美しい姫、やがて姫は身籠った。

けれど姫は日に日に悲しく打ち沈み、体もなんだか痩せてしまう。

「どうしたのだ、姫？ 早く元気にならなければ・・・お腹の子供にも悪いだろう、」

王子は心配し、多くの医者に見せるものの、返る答えは滋養を付けねば、の一言だった。

けれど、人魚は何を食べても満足しない。

ますます痩せ細ってゆくばかりだった。

元気がない姫のために、王子は船を用意した。

大きな船。沢山の人乗り込み、パーティを開いた。

「さあ、姫。城に居るばかりでは、ますます気が滅入るだけ。

そなたの為のパーティだ、何でも自由に食べるがよい。」  
船の甲板にはテーブルがいっぱい。

テーブルの上には大きな皿がぎっしり。

皿の上には美味しそうな料理がこんもり。

人々もさざめきながら、御相伴。

「さあ、姫。遠慮なさらず、」

口々に勧めた。

「何でも、お好きなモノを。」

姫はたまらず、喉を鳴らした。

とてもお腹が減っている。色んな皿から色んなお料理。ちよつと食べ、ちよつと飲み。

やがて姫は皿を置いた。

海の色は、どこの国も同じ色。人の体もどこでも同じ。

髪が生えて、手足があつて、鼻がひとつに目が二つ。その中に、ほんの少しの魔力。

ああ・・・、とても足りない。

姫は悲しく涙した。

「どうして泣くのだ、姫。」

ほら、お腹の子供も心配しているぞ？」

王子は優しく姫のお腹に耳を寄せた。とても大きな魔力。

「王子様・・・実は、王子様・・・」

姫は全てを話そうかと訴えかける。けれど、それは言えないままで口を閉じた。

「今度、パーティを開く時は、三人になるのだな・・・」

王子の言葉を聞いてしまって、言えなくなつた。

嵐の夜、この魔力に惹かれて、王子様を見付けたのだ、とは。

この魔力に惹かれて、伴侶としたのだ、とは。

「さあ、夜風に当たるのは良くない。

もうお休み。」

王子は姫の手を引いて、船の自室へと連れて戻つた。

真夜中に、姫はこっそり、抜け出した。

・・・とても足りない。

この二本の足を作るために、大事な魔力を使ってしまった。たとえ、王子が承諾してくれても、それでもまだ足りなかった。

人魚は伴侶を食べてしまう。子供を産むために、そうして子供を産んだ後には食も取らずに子供を守り、力尽きて死んでゆく。

子供のための一生。けれど、それは人魚の姫の国の事。

「王子様は大切な方。」

この国に必要な方、・・・私の国とは全てが違う。」

姫は小さく呟いて、こっそりと廊下へ出た。

そうして、本当の姿に戻った。

五人・・・いえ、四人で足りる。

四人の人に協力してもらおう。姫はずるずると移動する。

ベル・ボーイに出くわした。

恐怖に引き攣った顔、あまりの事に声も出せない彼を飲み込む。

あっという間に、たぶん、と消えた。

人々が恐怖の叫びを響かせた。

騒がないで、騒がないで、王子様が寝ていらっしやるの、

誰か、あと三人でいいの、

姫は必死に願ったが、その声を理解出来る者は居なかった。

人々は逃げ出した。

追い掛けて姫も甲板に這い登った。

沢山の人々、散りじりに逃げて、追うとまたバラけた。

逃げないで、協力して、この子達のために力をちょうだい、

姫は必死に追い掛けた。

兵士が剣を抜いて向かってくる。沢山の兵隊たち。

「この化け物め！」

斬りつけられて、悲鳴を上げる。

子供達を守らなければ、大事な子供たち、王子さまの子供、

わたしの大切な、愛する人の子供、  
姫は必死に逃げ出した。

騒ぎを聞いた王子が甲板に駆け上ってきた。  
隣りで眠っていたはずの姫の身を案じて。

「なにごとだ!？」

王子が目にしたのは、虹色に輝くウミウシのような怪物。

「・・・化け物、いつの間に乗り込んだ!？」

王子は勇敢に剣を抜く。

姫の姿がなかった事が、とてもとても気掛かりだ。

まさか、この怪物が？ 焦りと怒りがなймаぜで、王子は姫に斬りつけた。

なにをするの、やめて、王子様のこともが!

子供たちを守らなければ、大事な子供たち、愛する王子様の、  
姫は必死に逃げ出した。

王子は姫を、ついに船尾へ追い詰めた。

震えるさまは命乞いをするようにも、泣いているようにも見えて、  
王子の心に迷いをもたらす。兵士の声が届いた。

「姫のお姿はどこにも!」

人々の唸りが響く。王子の情けも怒りに変わった。

やめて、やめて、やめて、

子供たちを殺さないで、愛する王子様、やめて、

姫は変身を解けないままで、必死になって訴える。

もう、魔力が残っていない。

あと三人食べなければ、でも、愛する王子様はこの国に必要な人、  
あと三人、誰でもいいの、誰か、わたしに協力して、

姫は虚しく願いながら、剣を抱いて海へと落ちた。

王子は剣を突き立てた。とどめを刺された怪物は泣いた。

怪物は、姫の言葉でそつと王子に囁いた。

「・・・王子様、もし、わたしを哀れに思い召すなら、どうか、いつか・・・いつの日か、

わたしの元へ、戻っていらして・・・

どうか・・・」

王子はよろけて後ずさる。

怪物が発した、愛しい姫の声。

人魚の姫は海へと落ちた。白い泡が幾重に広がる。

王子は泡を見つめたまま、ただ呆然と立っていた。

そして、涙を流した。

おしまい

(後書き)

昔の作品を発掘したんで再発表。5年前？  
・・・10年前だったかな・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3447t/>

---

陸を渡った人魚姫

2011年6月28日07時34分発行